

(3) 豊富高校の実践

①高校の状況

豊富高校が立地する豊富町は、令和5年11月末現在の人口が3,591人の酪農が盛んなまちである。乳製品の他には、サロベツ原野や豊富温泉が有名で、交通アクセスも近隣の中核都市である稚内市までJR・車で約40分となっており、稚内市も通学圏内であると言える。実際に、豊富高校への市他町村からの入学者は数名いて、町が幌延町へのスクールバスも出している。町内の中学卒業者は、毎年、稚内や旭川の高校に数名が進学しているが、豊富高校の生徒（1学年約15人）は、概ね豊富町出身者となっているため、中学までのふるさと教育を受けてきた「愛郷心」が育っている生徒が多い状況がある。

このような町の状況から、高校の存続は町の重要な課題であるとともに、町外から通学してくる生徒が少ないこともあり、町民から見ても「高校生＝町内の子どもたち」という意識がある。つまり、地縁的にも高校や高校生への町や住民の支援意識が高い状況があるとともに、中学までに地域についての教育を受けてきた生徒が多いことから、地学協働を実施しやすい環境であると言える。

平成31年には学校運営協議会を設置し、「コミュニティ・スクール」を導入している。道内の高校の中でも早い時期からコミュニティ・スクールを導入できたのは、地域にある学校としての関係性があったからであろう。このように、豊富高校における地学協働の基盤となる組織がすでにできていることから、地域とともにある学校づくりを進める上で重要な取組となる地域探究については、学校運営協議会でも話題となってくる。

②研究の概要

豊富高校の令和3年時点の取組計画は、以下のとおりである。

<令和3年時点の取組計画>

月	取 組
1年次 (R3)	(目標) ・地域と学校の連携・協働体制の構築 ・地域資源、地域住民の期待やニーズの把握 ・地域探究学習の内容を整理、カリキュラムの再構成 (主な取組) ・コンソーシアムの構築、会議の開催 ・町議会、行政機関等へのアンケート調査 ・地域探究学習に関する研修、視察 ・研究(活動)報告会の実施 (検証の項目) ※定量及び定性 ・アンケート(選択式・記述式)による地域に対する意識及び行動の変化
2年次 (R4) 【予定】	(目標) ・地域探究課題の共有 ・地域学校協働活動への参画 (主な取組) ・地域住民とのワークショップ ・地域貢献活動、フィールドワークの実施 (検証の項目) ※定量及び定性

	・アンケート（選択式・記述式）による地域に対する意識及び行動の変化
3年次 (R5) 【予定】	(目標) ・地域課題解決に向けた事業の企画、実行 ・検証結果、活動報告書の作成、発信 (主な取組) ・地域住民との協同イベント開催 ・プロジェクト成果報告会の実施 (検証の項目) ※定量及び定性 ・アンケート（選択式・記述式）による地域に対する意識及び行動の変化

(令和3年度北海道 CLASS プロジェクト実施計画書 北海道豊富高校)

豊富高校では、本プロジェクト以前から地域探究を実施しているため、探究の経験はあったが、基本的に担当となった学年の教員の意向で活動を決めていた。そのため、前年度までの連携先を中心とした活動となっていた。本プロジェクトでの新たな取組として、コンソーシアム会議の実施や地域 Co による新たな繋がりを活かした取組の実施を計画している。

学校運営協議会では、課題の共有はできているが、せっかくの会議が効果的に活動に活かされていないという課題感があり、地域探究の活動を学校運営協議会で共有し、地域での活動が効果的に実施できるように進めていくこととした。

③推進体制

前述のとおり、担当学年の教員が活動内容を決定しているため、前年度踏襲になりがちだったり、活動の質が学年によりばらつきがあったりと不安定な要素があった。また、本プロジェクトについて、教職員の共通理解が十分に図られていない状況もあった。こうしたことから、本事業以前のノウハウを活かして探究を進めることにとどまり、クリエイティブな活動への改革が進まなかった。

しかし、地域 Co として、町教育委員会の石川次長が関わることとなったことで、地域をよく知る地域 Co がつなぎ役として、様々な活動を実施することができるようになった。町教育委員会の「次長」という立場上、町内の小・中学校にも顔が利くため、小・中・高のつながりづくりも進みやすい状況になった。異動がある教職員よりも、地域を知る人がつなぎ役として活動へのアイデアを出していける状況は、地学協働にとって重要であることを示している。市町村教育委員会の職員にも異動があるが、市町村教育委員会の社会教育部局は、組織としても地域人材とのつながりがあるため、学校の求めに応じた人材紹介等の Co 機能を発揮することができる。

また、町と包括連携協定を結んでいる「北海学園大学」と連携した活動も実施している。具体的には、大学教授による SDG s についての講義のほか、大学生が高校生と対話しながら課題解決に向けた意見交換を行うことで新たな視点を得たり、考えを深めたりすることができた。大学生との関わりは、探究の手助けになるとともに、高校生のキャリア形成にも刺激を与えることにつながっている。大学生との交流で大学への憧れやイメージを持つ生徒も出てくるなど、有意義な学びとなっている。

これらを踏まえて、豊富高校では「探究プロジェクト委員会」を立ち上げ、担当学年になった教職員が毎年内容を考えるのではなく、地域 Co がつないでくれた「地域人材とのつながり」を活用して「探究のプログラム化」を進めている。あわせて、学校運営協議会に「探究部会」を設置し、この中で地域探究に係る地域学校協働活動を議論することで、協議会委員が探究に関わりをもつ状況を創り、組織的に Co 機能を維持していく方向で検討している。

これにより、学校が地域としっかりつながりながら、安定的に地学協働を推進していくことができる体制整備が進んできた。

④活動

豊富高校の活動で特徴的なのは、「高校生議会」の取組である。これは、令和3年に「北海道学」の取組として実施しているもので、町議会としても、「開かれた議会」「議会活性化」の目的で受け入れており、議会本番前に議員が事前にサポート授業を実施するなど、町長をはじめとした「役場」と「町議会議員」の高校生を育成する意識により実現している。



↑ 高校生議会は、大人たちにも刺激となっている

こうした取組は、高校生の政治理解や参政意識の醸成に直接的につながると思われる。自分たちの質問や提言に町長をはじめ、役場の大人たちが答えることで「自分たちがまちづくりに関われるんだ」という意識をもたせ、地域を担う人材育成に資する活動につながるのではないかと。

令和5年度には3年生が「個別探究」するチャレンジをしている。探究の手法の問題ではあるが、生徒が「11人」という少人数であるため、個別の探究テーマをもったとしても、ある程度の教員数で対応できると判断してチャレンジした取組である。もちろん、地域の人に伴走を手伝ってもらうとか大胆に生徒に委ねるなど、やり方によっては大人数でも可能かもしれないが、豊富高校では、小規模であることを強みとしてチャレンジしている。前述のとおり、探究のプログラム化を進めている中で、こうしたチャレンジを行うことは、よりよいプログラムづくりにつながると思われる。

⑤3年間のまとめ

<成果>

- ・学校運営協議会に「探究部会」を設置し、地学協働について協議し、Co機能を持たせる組織として位置付けた
- ・町教育委員会次長が地域Coとして活動に関わったことで、連携先が大きく広がった
- ・地域Coによりできたつながりを活かして、学校としても地域とつながった
- ・探究について、学年に委ねると、内容や関わり方にばらつきが出てくるため、「探究プロジェクト」により、プログラム化することで、全校的に共通理解を図って進めることができた
- ・資源・人のほかに、文化も地域の活性化に必要な要素
- ・地域の良さを探究し、地域の発展について意見を述べられるようになった
- ・探究による学び方を身に付けた

<課題>

- ・探究を進めるに当たって、教員が組織や運営について理解する必要がある
- ・各学年の探究のプログラム化
- ・様々な分野の専門性を高めるため、大学等との連携・交流が必要
- ・就業体験と探究課題の関係の整理

⑥資料（資料編に掲載）

- 豊 1 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第1次》
- 豊 2 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（1年次）《第2次》

- 豊 3 令和3年度 北海道 CLASS プロジェクト実施報告書（1年次）
- 豊 4 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（2年次）
- 豊 5 令和4年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（2年次）
- 豊 6 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施計画書（3年次）
- 豊 7 全道地学協働活動研究大会発表資料
- 豊 8 令和5年度 北海道 CLASS プロジェクト実施成果報告書（3年次）